

なごやの学童保育

市連協ニュース No.3

2017年度・7月4日発行
 名古屋市学童保育連絡協議会
 TEL(052)-872-1972
 FAX(052)-308-3324
 E-Mail:info@gakudou-nagoya.org

HP <http://gakudou-shirenkyou.nagoya/> Facebook <https://www.facebook.com/NagoyaNoGakudouHoiku>

指導員研修を充実させよう

県議会への請願署名スタート

愛知学童保育連絡協議会(県連協)の愛知県議会への請願署名の取り組みが始まりました。県が実施する学童保育指導員研修の内容の充実を求める内容です。目標筆数は全県で10万筆。提出期限は11月です。県連協に加盟する私たち名古屋市学童保育連絡協議会(市連協)でも、しっかり取り組んでいきましょう。

【請願内容】

1. 放課後児童クラブの運営に支障が出ることがないように、現任の放課後児童支援員等が全員放課後児童支援員の資格を取得できる放課後児童支援員資格研修を2019年度までに実施してください。
2. 放課後児童支援員等資質向上研修を、次の要件を満たしたもので実施してください。
 - ・グループワークで演習ができる会場
 - ・学童保育の実践に生かせる内容

資格研修は最低条件

2015年度に「子ども・子育て支援法」が施行され、資格を持つ放課後児童支援員(学童保育指導員)の常時1人配置が学童保育所に義務づけられました。夏休みなどの長期休暇中や土曜日の開所では有資格者の交代要員が不可欠。交代で休暇を取得することも考えれば、1カ所の学童保育所に3人以上の有資格者が必要です。

資格は、県が実施する資格研修の受講が条件

情勢学習会に参加しよう

8月22日(火)19:30～ 金山・労働会館東館2Fホール
 「名古屋市の学童保育施策について」

“民設民営”の名古屋市の学童保育施策は、実は全国では少数派！他都市と比較しながら名古屋市の施策の課題を考えます。国の基本施策が大きく変わる今だからこそ、一緒に学びましょう。

です。受講前でも他の条件を満たせば有資格と見なされる経過措置は2019年度で終了します。ところが県が実施する資格研修には年度ごとの定員があり、現在は資格研修をまだ受講できていない指導員がたくさんいます。2019年度までに必要な全員に資格研修が実施されることは、学童保育所運営の最低条件と言えます。

また指導員には、子どもの健全な成長を支援するための高い専門性が求められます。資格研修だけではなく、より実践的な「資質向上研修」の充実も、子どもたちの“豊かな放課後”のためには欠かせません。

署名ゼロ世帯をなくそう

請願署名は、学童保育関係者の研修充実の願いの真剣さを示すものです。どの世帯も、保護者と学童保育を利用する子ども本人の最低2人は署名ができるはず。各保護者会とも全世帯参加をお願いします。

<請願署名マニュアル>

- ・本人署名では印鑑が不要になりました。
- ・代筆OK。この場合、印鑑かサインを。
- ・県外在住の人や外国人でもOK。
- ・同じ住所、同じ名字は「同上」で可。
 「〃」は誤読されるので避けましょう。
- ・鉛筆はダメ。黒ボールペン等で。

※学童保育所単位での提出をお願いします。

昨秋の「全国研 in あいち」の感動を今年は神戸で

全国学童保育研究集会 in 兵庫

受付、始めました！ 11/4,5(土日)

全体会=神戸国際展示場/分科会=ポータルイトと三宮の計5施設
 詳しくは案内リーフレットと全国研ニュースで(各父母会に配布)

学習会「指導員の確保に向けて」9/19(火)19:30～労働会館・本館2階

実践を綴ろう

全国学童保育指導員学校レポート

「第42回全国学童保育指導員学校 西日本・石川会場」(全国学童保育連絡協議会主催)が6月11日(日)に金沢市で開かれました。基調講演の講師は、元小学校の先生で、妊婦や末期癌患者を招いた「いのちの教育」や作文教育で注目を集め、現在は大学で教える金森俊朗さんでした。受講者のレポートです。

●小学校の時の思い出

金森先生のゼミの生徒さんに小学校の時の思い出を書いてもらったとき、特にその設定がなかったにもかかわらず、学童保育での思い出を書いた学生さんがいたそうです。それほどまでに、学校での思い出よりも学童保育での思い出のほうが鮮明に残っているのだとおっしゃられていました。「鯉釣り」について書かれたものを紹介されていました。学校帰りに鯉を見つけたところから始まり、鯉を釣るための工夫、たくさんの失敗談、それが鮮明に綴られていたと語られていました。

私の学童保育所でも行事の後に感想文を書いてもらっています。その中には指導員が思いもよらぬところで活動を楽しんでいることが綴られていることがあります。ここであえて「綴る」という言葉を使わせていただいたのは、金森先生が冒頭で、昭和初期の「綴り方教育」を題材にした三浦綾子さんの著作「銃口」を紹介されたからです。主人公の先生が行った綴り方教育。そこに描かれた子どもの書いた作文に涙を禁じ得ないものがあります。それは、確かに小説中のことで、実際子どもの作品ではないかもしれませんが、取材に基づいたいきいきとした子どもの思いが詰まった作品だと私は思いましたし、金森先生もそうした実例として紹介されていたと思います。書くということの大切さを改めて感じさせられました。それは、指導員も同じです。金森先生もおっしゃられていましたが、基調報告の中でも「自己研鑽と現任研修」の大切さが語られていました。指導員が実践記録を書くということは、学童での出来事を振り返り、心に刻み、確かめる作業だと思います。指導員のみなさん、ぜひ実践記録を書いていきましょう。

●「せんせいあのね・・・」

「ランドセルの中に思いをいっぱい詰めてやってくる」。それなのに「残念なことに今はその貴重な時間を漢字の書き取りなどに使われている」と、金森先生もおっしゃられていました。そこは自分も大きく反省せざるをえないなと思いました。「お帰り」と温かく迎えているつもりが、息つく間もなく「宿題は？」と声をかけてしまっているなあと思いました。

「せんせいあのね・・・」を聞いていないわけではないけれど、子どもには子どものタイミングがあるだろうし、一旦疲れを下す時間が大切なのだろうなと思いました。金森先生も「学童には、学校の疲れを詰め込んで『ああ疲れた』と帰ってきていませんか」ともおっしゃっていました。皆さんの学童ではどうでしょうか？

そのような事例は家庭でも起きているともおっしゃられていました。父母が言う「あとで」という言葉は、断りの言葉になっている現実。思い当たる父母の方もおありなのではないでしょうか？

そんなとき子どもたちはペットの犬に聞いてもらう話。会津磐梯山に聞いてもらう話を聞いて、如何に伝えること、思いのたけを語ることが大切かについて考えさせられました。人からペットへ、それが無機物になっても聞いてもらいたい、伝えたいのだと。そして「アンネの日記」なのだ最後におっしゃられました。想像もできない状況下で、たとえ語りかける相手や物がなくても生に前向きいられたのは、日記を綴り続けたことにあるということは想像に難くない話だと思いました。

また、こうもおっしゃられていました。「今の父母は話を聞いてあげられる勤務状態の人が少ない。そんな中で、そんな子どもたちの思いを届けることが、働く人たちへのエールなのだ」と。

●そうだ指導員学校へ行こう

共存的他者のこと、子どもが原風景を刻むこと、まだまだ語りたいたことがいっぱいあります。皆さんも聞きたいかもしれません。「そうだ指導員学校へ行こう」となってもらいたいのでこの辺で全体会の話は終わります。基調報告でも語られたことはそのようなことだったと思います。指導員の仕事の在り方が示され、実現には力量の向上は不可欠です。そもそも研修を受けること自体が求められている仕事の自身の一つです。

少しだけ分科会についても触れさせていただきまします。私が受けたのは第5分科会「学童保育と集団作り」でした。

まさに、指導員の実践記録をもとに行われた分科会でした。自分も何度か経験してきましたが、実践記録を報告するってめちゃくちゃ大変です。書くだけでも大変なのにそれを人前で発表し、それをたたき台にして話を進めていくのですから、相当な覚悟が必要です。全体会の金森先生の話にもあった通り、書くという作業はとても大事な仕事です。レポートをもとに、如何に子どもたちが集団の中で信頼関係を築き、周りを仲間だと思い、居場所を作っていくようにするかという検討がグループディスカッション中心に進められていきました。暴力を振るうことが多い「A君」の仲間作りの課題について語り合いました。「困った子は困っている子」「お互いの思いを知ることが大事」「共同作業で達成感をもたせよう」などの意見が出されました。

また、実践記録の中で、A君の良いところを見つけ、それを周りに伝えるくだけりがありました。それがきっかけで、仲間には入れるようになったA君でしたが、信頼関係にはまだ一步足りないというのが全体的な見解でした。

そこに、A君の「どうせぼくなんか・・・」という思いの受け止めがないことに気づきました。金森先生からは、「否定的な物言いの生徒に対する学校での働きかけの多くは『大丈夫、君にも良いところがある』と否定感を否定してしまうけどそれは間違いではないか」という話がありました。否定するのではなくそこに寄り添うことの大切さを語られていましたが、まさにその実例だったように思います。「そういうときもあるよね。先生だって・・・」のような働きかけが必要だとおっしゃられました。それを実感できた文科会でした。

否定の否定は決して肯定ではないのだな。指導員は「子どもの丸ごとを受け止める」というけれど、丸ごと受け止めることの意味を改めて考えさせられました。

(名東区 指導員 亀井達也)